

# 津山藩の安永改革

瀬 島 宏 計

はじめに

今日、藩政改革の問題は、個別藩政の改革に完結させるのではなく、幕政と藩政を相互に関連させる視角、則ち幕藩制改革、あるいは幕藩制政治史ともいべき視角で検討する必要性が叫ばれている。<sup>①</sup>

さて、近世中期藩政改革では、特徴の第一として、藩主主導と有能な家臣登用による改革遂行が指摘されてきた。しかし、従来の研究では、いわゆる「賢宰」の意見等が藩政に反映され、改革が実現するという改革遂行が専ら示される一方、藩主主導の内実は、笠谷和比古氏による一連の主君「押込」慣行研究を除けば、必ずしも明瞭ではない。<sup>②</sup> 笠谷氏は、近世中期の政治構造につき、阿波蜂須賀家の事例から、「家老層の勢力が安定的に存在する一般的な状況の下では、主君はその権威と権力をもってしても容易には専制的権力行使がなしえない」と指摘された。<sup>③</sup> 福田千鶴氏は、寛文・延宝期の「一元的な藩政」の確立以後、家老合議制の進展とともに藩政機構が整備されていたといわれた。<sup>④</sup> そして吉村豊雄氏は、中期藩政改革の名君として著名な細川重賢を「希薄な藩主」と位置づけ、重賢が藩政に影響力を及ぼしたのは藩主就任時の人事に尽きるといふ注目すべき見解を示された。<sup>⑤</sup> 以上の研究動向からすれば、近世中期藩政改革における藩主主導は至極困難なように思われる。果たして近世中期の藩主は藩政に如何に関与したのであろうか。

本稿は、このような今日の研究動向を踏まえ、近世中期藩政改革の一事例として、津山藩安永改革を取り上げる。津山藩は、慶長八年（一六〇三）以来美作一国を統治してきた森家の改易の翌年にあたる元禄十一年（一六九八）、松平宣富が美作国のうち一〇万石を拝領したことにはじまる。津山松平家は、家康の二男結城秀康（越前藩主六七万石）を祖とする越前家の一つである。秀康の孫光長のとき、越後高田二五万石に転封となり、延宝七年（一六七九）、越後騒動によつて改易され、この年一〇万石の大名として再興された。津山藩は、享保十一年（一七二六）、五万石に減知され、文化十四年（一八一七）、一〇万石に復し、廃藩置県を迎えた。よつて、本稿の対象は、五万石時代の津山藩である。安永改革期の津山藩五代藩主松平康哉は、細川重賢・上杉治憲、そして天明期には松平定信らと盛んに交わり、松平定信は康哉を「博学弁才無双、相学天学をなして高談をよろこぶ」と評した。康哉は、前述の吉村氏が検討された細川重賢と交流した人物として知られている。

津山藩安永改革に関する先行研究では、渡部武氏の著作・『岡山県史』・『津山市史』等により、飯室荘左衛門と大村莊助の上書の内容紹介と安永改革の大掴みな経緯が示されているに過ぎない。そこで本稿では、幕藩制改革という視点を念頭に置きつつ、第一に安永改革実施過程の跡付けから、藩主の藩政への関与の仕方の解明、第二に改革を正統化する家門藩独自の論理の抽出、これら従来の津山藩安永改革研究において不十分な検討しかなされてはいない二点を課題とする。特に、近世中期藩政改革における藩主の藩政への関与の問題は、当該期の藩の政治構造を検討するさいに重要な論点であり、その点で、津山藩安永改革の事例は貴重であると考ええる。

なお、吉永昭氏によれば、宝暦・明和・安永期藩政改革の特質として、前述の特徴に加え、藩校設立と儉約令等の緊縮政策、支配機構改革、法令整備、年貢増徴策、藩札発行等の金融政策、殖産興業政策、農村荒廃を背景とした社倉・義倉や赤子養育制度の実施、勸農に対する藩の関心の高まり等が指摘されている<sup>13</sup>。

## 一 安永改革に至る経緯

ここでは、康哉家督相続前後の津山藩政について概略を述べる。

津山藩では、初代宣富死去後、二代浅五郎は享保六年（一七二一）六歳で家督を相続し、同十一年、十一歳で死去した。これに伴い、津山藩は城地の存続は認められたものの、一〇万石から五万石への半知となり、宣富の弟知清二男又三郎（長熙）による家督相続が幕府より許可された。<sup>(14)</sup>三代長熙は享保十一年七歳で家督を相続、同二十年十六歳で死去し、幼少の藩主が短期間で交代した。よって初代宣富に比べ、二代・三代藩主の藩政に対する影響力は低下し、その一方で御用席を中核とする藩政機構の整備が促進されたと考えられる。御用席とは、「御用所」において家老・年寄により構成される津山藩の意志決定機関であり、家老・年寄ともに結城秀康以来の家臣の中でも特定の家に独占された世襲の役職であった。

出雲松江藩主松平宣維二男である四代長孝も享保二十年、十一歳と幼少で家督を相続した。長孝期は佐久間主計・安藤鞆負両家老による長期政権を特徴とする。長孝は宝暦六年（一七五六）以後、三十八歳で死去する宝暦十二年まで江戸屋敷にて病床にあり、参勤を免されて療養に専念していたから、この期間、藩政への参画はなかったと思われる。長孝病氣療養中の宝暦九年から十一年に実施された、九条家家来佐々木一族の登用、大庄屋揚り屋入り、中庄屋手鎖・村預け等の中間支配機構の廃止と年貢増徴、座の廃止等の藩の歳入増を特徴とする宝暦改革の失敗は、御用席を中核とする従来の藩政の行き詰まりを露呈したといえる。<sup>(15)</sup>

そのようななか、宝暦十二年（一七六二）五月二十三日、長孝嫡男康哉は十一歳で家督を相続した。明和三年（一七六六）二月十五日、康哉は十五歳で將軍家治に謁見し、十二月十九日、従四位下に叙せられ、越後守を称し、同四年二月朔日、前髪を執り、<sup>(16)</sup>翌年初入りした。

表1 類焼表（元禄11年～安永6年）

年 号	西暦	月	日	場 所	出 典
元禄11年	1698	9	6	江戸(柳原)屋敷	「江戸日記」
宝永2年	1705	11	5	江戸(鍛冶橋上)屋敷全焼	「江戸日記」
正徳5年	1715	12	晦	江戸(鍛冶橋上)屋敷	「江戸日記」
享保2年	1717	正	22	江戸鍛冶橋上屋敷	「江戸日記」
享保9年	1724	3	23	大坂蔵屋敷	「日記」(国元日記)
享保10年	1725	2	14	江戸高田下屋敷	「江戸日記」
享保16年	1731	4	15	江戸桜田中屋敷	「江戸日記」
宝暦6年	1756	11	23	江戸鍛冶橋上屋敷	「江戸日記」
宝暦7年	1757	11	19	江戸高田下屋敷	「江戸日記」
安永元年	1772	2	29	江戸鍛冶橋上屋敷全焼	「江戸日記」

※( )は『徳川諸家系譜』で補う。

康哉家督相続後の津山藩は、宝暦十二年に「大手組防火」<sup>⑰</sup>、明和六年に浅草御蔵火の番を命じられた<sup>⑱</sup>。明和八年、康哉は彦根藩主井伊直幸の長女御勢与を正室に迎えた<sup>⑲</sup>。この婚礼とそれに伴う老中招請は、惣町から銀一三四貫目余の借り入れによって実現した<sup>⑳</sup>。安永元年二月二十九日、江戸鍛冶橋上屋敷が全焼し(表1)、国元では、一〇五〇石から一七〇石取りの家臣は「八歩引」き、一六〇石から二八俵取りの家臣は「六部引」き等の高率の借り上げを実施し、

「在中林山老畝ニ付銀貳匁ツ、同持高老石ニ付同老匁ツ、」の懸銀、札元・御用達へ銀七〇貫目、惣町へ銀三〇貫目の御用銀を賦課<sup>㉑</sup>して対処した。さらに、明和七・八年、安永元年と三年連続の損毛を記録し(表2)、年貢収納高は減少の一途を辿り(表3)、康哉家督相続後の藩財政は危機的状況に向かいつつあった。

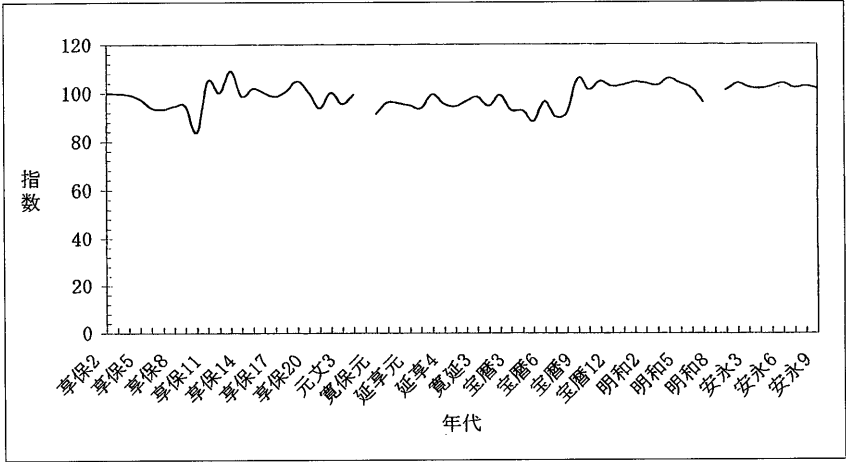
明和五年六月二十六日、康哉は十七歳で津山に初入りし、九月十八日、「厚キ 思召を以<sup>㉒</sup>」て「御条目改正并御儉約之儀<sup>㉓</sup>」を申し渡した。内容の詳細は不明であるけれども、先代長孝初入り直後の寛保二年十一月十五日に出された「御条目并御儉約書付其外覚書<sup>㉔</sup>」と無関係ではないと考える。九月二十五日には、町方「御条目」の読み聞かせが再令された<sup>㉕</sup>。

そして二月余り後、大規模な役替えが実施された<sup>㉖</sup>。十一月二十二

表 2 損毛表 (元禄11年～安永 6 年)

年号	西暦	月	日	損毛高	出典
宝永 4 年	1707	10	6	31190石余り	「江戸日記」
享保 9 年	1724	9	晦	16000石余り	「江戸日記」
享保17年	1732	12	16	4466石余り	「江戸日記」
元文 3 年	1738	12	20	15360石余り	「江戸日記」
寛保元年	1741	11	13	12700石余り	「江戸日記」
延享元年	1744	11	晦	10320石余り	「江戸日記」
延享 2 年	1745	12	20	10350石余り	「江戸日記」
延享 4 年	1747	11	15	10130石余り	「江戸日記」
寛延 3 年	1750	11	24	10219石余り	「江戸日記」
宝暦 5 年	1755	10	27	15580石余り	「江戸日記」
明和 7 年	1770	12	3	13996石余り	「江戸日記」
明和 8 年	1771	11	16	13406石余り	「日記」(国元日記)
安永元年	1772	12	29	11014石余り	「御政事奉行日記」
安永 4 年	1775	閏12	7	13070石余り	「江戸日記」

表 3 年貢収納高指数表



出典：「地方日用記」所収「享保二年以降御成箇通記」  
※ 1 10万石時代は享保 2 年、5 万石時代は享保12年を100(基準値)として計算した。  
※ 2 元文 5 年と明和 8 年の収納高は不明である。

日、家老佐久間主計・年寄佐久間兵右衛門父子の罷免、家老安藤靱負の遠慮、十二月九日、大番頭格郷中惣吞込三木甚左衛門の役儀召し放し、知行半知、大目付格へ降格のうえ遠慮等が申し渡された。安藤靱負は翌年正月十六日、役御免となった。代わりに十一月二十二日、安藤造酒助が家老、渡部惣右衛門が年寄に、十二月朔日、大熊兵庫（後、勘解由）が年寄に、二十三日には家老に、大熊跡役年寄は翌年正月十六日に伊達隼人（後、与兵衛）に、十二月十日、大目付井上弥三兵衛が郷中吟味を兼役した。その他、十一月二十七日、隅田族が小姓頭に、翌二十八日に植木左士が小納戸に任じられた。これにより、長孝期の藩政を掌握し、宝暦改革を主導した人物が罷免され、後日「奉告文」に署名して安永改革を推進する人物が登用された。佐久間父子罷免の理由として、「老人伝聞録」によれば、当時津山藩は康哉の初入り・乗り出しの資金にも難渋する有様であった。加えて、津山藩はそれまで借財の不義理が多く、金主の気受けが悪かった。そこで、佐久間家の自借と称して佐久間父子が金主を吉原で接待し、漸く入用金を借り入れた。その行為を康哉は「放蕩」と見なし、彼等を処分したという。「勤書」によれば、確かに康哉の將軍家治謁見のときも、前髪を執るさいも佐久間父子は江戸におり、明和三年三月二十六日、兵右衛門は「御勝手向出精相勤、御目見無御滞被為済」たとして、刀一腰を頂戴している。兵右衛門はその後召し出されなかったけれども、主計は天明二年（一七八二）七月七日、家老帰役となった。家臣登用では、当時若年であったと思われる大熊勘解由の急速な家老昇進が目を引く。彼は後世、康哉の最も信頼の厚い家臣として著名な人物である。<sup>(29)</sup>

また、十二月十四日、勘定奉行経験者で当時町奉行の永井甚大夫は、御用番（年寄）渡部惣右衛門より、現在の勘定奉行は「古格」を知らないから、思うところがあれば勘定奉行に話すように伝えられた。その申し渡しのなかで、「今般重キ 御意之趣も有之義、是非五・七年之内、御趣意相立候様無之而は不相成事二候<sup>(30)</sup>」と、康哉による改革への意志が表明されており、初入り時点ですでに藩政改革が想定されていたといえる。

明和七年の二度目の国入り後、康哉は、小姓頭隅田族を通じて城下町商人の調査を町奉行大澤三平に命じ、閏六<sup>(34)</sup>

月九日、藩は「不寄誰人」家中より、勝手向きの意見を求め、七月二十二日、勘定奉行四人に町奉行・郡代兼帯を命じた。<sup>(35)</sup>

このように、康哉家督相続後、藩主の国入りを契機として、大幅な役替え、城下町商人の調査、家中に対する意見徴集等と施策が集中し、国元では藩主の存在感が強調されている。

## 二 大村莊助と飯室莊左衛門の上書

ここでは、藩政改革を実施するにあたり、康哉の周辺で現状の藩政において何が問題とされ、その対策としてどのような構想があり、康哉に改革への動機付けをどのように与えていたのか、そして従来の研究では分析されることのなかった大村莊助・飯室莊左衛門と康哉との関係につき、両者の上書から検討する。

大村莊助は、享保九年（一七二四）、熊本藩士大村源内の弟として生まれた。<sup>(36)</sup>「勤書」によれば、大村は、明和元年（一七六四）六月五日、康哉十三歳のとき、格式大番組、御擬作十五人扶持で召し抱えられ、七月四日以来、「於 御前講釈被 仰付」られた。笠井助治氏によれば、大村は閩齋学派の儒者であり、同二年の学問所設置に深く関与した。<sup>(38)</sup>同八年七月十八日、大村は、格式小姓組御側勤に昇進した。安永元年（一七七二）六月二十一日、格式番外郡代となり、後述のように「郷中御条目」の改正等に尽力し、「津山文学の盛なる、<sup>(37)</sup>庄助其鼻祖なり」と、後世評価の高い人物である。

飯室莊左衛門は、明和五年十月五日、康哉十七歳のとき、大村同様格式大番組、御擬作十五人扶持で召し抱えられた。飯室も儒者であり、私見の限りでは、明和七年二月二日を初出に江戸で講釈を行った。同八年七月十八日、大村同様格式小姓組御側勤となった。<sup>(40)</sup>

以上から、二人は、後述する明和八年八月二十日の改革実施の演説以前、ともに康哉の側近であり、康哉に少な

からざる影響を与える立場にある人物であったといえる。

まず、飯室の上書から検討する。彼は改革実施以前の明和八年五月十一日付けの「更張策上表」<sup>(41)</sup>において、医師井戸通斎の上書を「不学・無術之至り」と、大村の上書について、「役方面々肝胆を砕き、相考申候様被仰付云々と書候条、如何可有御座候や」と二人を批判した。そのうえで、「誠に任すへき一人をとくと御選ミ遊し、其者二しかと被仰付、余れる衆才ハ、悉く右一人之指図を請候様ニ仕度候」と述べる。これにより、飯室は一人に改革を委任する構想を持ち、大村は従来の役方に改革を構想させる考えであったこと、明和五年五月十一日段階で、飯室は井上と大村の上書を閲覧しうる立場にあり、康哉から厚い信頼を得ていたことがわかる。飯室は、「更張策上表」において、現状の問題として、役職を月番持ちにすると、その場しのぎの奉公になると月番持ちの悪弊を説き、明和八年十月二十八日付けの「奏言」<sup>(42)</sup>のなかで、年寄以上について、大目付の申し達しは聞くけれども、大目付に相談はしないという慣例をやめるように指摘している。

飯室は、「更張策上表」の序において、自らを「臣かことき顧問」と、安永三年五月十五日付けの「密奏」<sup>(43)</sup>において、「師の座をあたへ給ひ、加るに腹心を以て望ミ給ふ」と述べており、康哉の「顧問」であり、「師」であり、「腹心」であると自任している。大村・井戸上書批判の背景には、飯室による改革主導権の掌握があったものと思われる。

次に、明和八年八月の提出と考えられる大村莊助の「口上書」<sup>(44)</sup>を考察する。大村は「只今御用席を信服仕ものハ無御座候」と御用席の不信任を問題とし、大目付に御用席を牽制しうるだけの権限を付与するように提案し、借金を頼みとする現在の藩財政に警告を発している。さらに「惣鉢記録之仕様不宜、くわしからず、明白ならずと被存候」と記録不整備を問題に取り上げ、「御制度」未確立が津山藩の「衰廃」の原因であるとし、「全備之御制度」確立を提言する。そして、「御制度御立」でと文武奨励によって「国家安穩」をもたらせば、康哉は「賢明之君」に



なれる。「賢明之君」の根本は学問である、と説く。

このように飯室とは異なり、大村は康哉に一種の名君論をも展開している。大村は、他の箇所でも、「乍恐御家之儀は、国家之御嫡流御座候処、御不運ニ而、天下之主と不被為成、其上公辺方も御忌諱有之所<sup>45</sup>御滅地と成、其上御代々御早世被遊候。今更如何共難被遊候。然上ハ、只御家格を御守被遊、別事ハ御高二応し御暮被遊、文武之道明ニ御座候而、天下之望と成申候様ニ御座候は、万一の時は、天下之諸侯皆相属、天下之士皆臣たる事を願可申候」と、康哉に、津山松平家当主としての指針をも示している。すなわち、津山松平家は、「国家之御嫡流」であつたけれども、「天下之主」になれず、そのうえ、幕府の「忌諱」により滅知され、代々の津山藩主は夭折したから、今となつては如何ともしがたい。そうであるからには、康哉は従来の家格を守り、それ以外の事柄は石高相応にし、文武を究めて「天下之望」みとなれば、万一のとき、「天下之諸侯」は皆康哉に属し、「天下之士」は皆臣下となることを願うであらうと述べる。大村は、康哉に、「賢明之君」や「天下之望」みになれと進言しているのである。この発言は、宝暦・天明期における幕藩体制を相対化した発言としても注目される。

大村の発言の背景には、当時の幕府と福井松平家との関係があつたと思われる。福井松平家は、寛延二年（一七四九）一橋宗尹の嫡男於義丸を養子に迎えた。於義丸は、宝暦五年（一七五五）、元服して重昌と称し、従四位上少将に叙任され、宝暦八年に死去した。しかし、再度一橋家より重昌弟重富を養子に迎え、宝暦十年、元服して従四位上少将に叙任され、同十三年、越前国の幕府領のうち、八万三八三六石余りを預けられた。貞享三年の半知以後、世子の元服時の官職は侍従、重昌養父宗矩の極官は従四位下につき、福井松平家は一橋家から養子を迎えて家格上昇を果たしたといえる。これにより、福井松平家において結城秀康の血統は途絶えた。<sup>46</sup>大村は、この関係を捉えて、津山松平家の来歴を引き合いに出し、自己の改革案の妥当性を主張しようとしたのではないだろうか。また、大村よりも遅く召し抱えられたにもかかわらず、大村よりも重用されていたと考えられる飯室への対抗意識があり、

そのことが、飯室ではなく、私の意見を聞けば名君になれるとも解しうる発言に繋がったと思われる。

大村の上書中には、飯室よりも早くから康哉に進講していたにもかかわらず、飯室のように康哉の師であり、側近であると自任する文言はみられない。明和八年七月十八日に兩人とも格式小姓組御側勤に任じられているけれども、大村と康哉、飯室と康哉との関係は全く異なる。

### 三 「更張」新政の開始

改革は、明和八年八月二十日、江戸において開始された。同日、役替えにより、隅田族は小姓頭の他に奥取次、小納戸等奥向きの役職を兼帯し、大澤長大夫は、大目付の他に、御勝手方、勘定奉行等藩の財政に携わる役職を兼帯した。<sup>(46)</sup>大澤は大熊によって推挙されたと考えられ、<sup>(47)</sup>「勤書」によれば、小納戸、格式使番供頭定供、大目付、そして前日の八月十九日に「御勝手方請込」を命じられた康哉の側近出身である。この人事により、康哉は江戸の藩主側近を隅田に、江戸の勝手方を今まで実務経験を持たない大澤に掌握させたといえる。その後、藩政改革を宣言する演説が行われた。<sup>(48)</sup>ここでは、「御家柄故」の任用、宝暦改革の失敗、去年・今年の旱魃、藩主の婚礼、借銀の増加による「永日之御取続」の困難が改革の要因であるとし、大澤長大夫と国元の一人の「勘弁を以諸事儉約取計、往々御取箇を以御取続」き、つまり歳出額を儉約によって年貢収納高の水準にまで削減するという基本線が示された。その後、この演説に則り同年九月二日、勘定奉行経験者で当時大目付の永井甚大夫が「御国勝手方引受」に着任した。<sup>(49)</sup>

翌日、康哉は、結城秀康以後代々の祖先に改革を宣言した。

八世孤孫越州刺史従四位康致稽首再拜して、敬て、

浄光公（秀康）

西巖公（忠直）

惠照公（光長）

源泉公（津山藩初代藩主宣富）

智円公（二代浅五郎）

戒善公（三代長熙）

隆照公（四代長孝）の靈前ニ奉訴る。国家代々相統天の不弔を受け、封地削少せらるゝ事数度ニ至るといへ共、  
代々の成法を變せんす相守て今日に至れり。然るに、其後世上困窮ニ及び、家政是ニ因て追日衰微し、その上  
水旱の災頻りに至り、今年ニ至て四民の業立かたぐ、実に朝ニして夕を計すと言へし。康致謹て考るに、此時  
ニ至り、更張の策を起すんは、国家保シ難しと。因て執事者

家老 安藤造酒介<sup>(ママ)</sup>国陸

大熊勘ヶ由昌芳

年寄 下村友右衛門藤高

小須賀一学種徳

大橋十太夫殷信

扈從頭 隅田族武貞

大目付 大沢長大夫正庸

小納戸 植木左士包武

側勤儒者 大村庄介<sup>(ママ)</sup>貞陸

飯室莊左衛門偉文

等と共に二計を合せ、前法二拘らす国家永安の法を定む。誠ニ康致渺少なる代々の成法を戲弄するに似たりといへ共、実ニ止事を得ざる二出ると言。康致稽首再拜敬白

明和八年辛卯八月二十一日

孤孫康致再拜<sup>⑤</sup>

この「奉告文」の中で康哉は初めて「更張」という安永改革の標語を使用した。その作成目的は、次の二点にあると思われる。第一に、秀康以来の代々の祖霊に対し、藩政改革を宣言することで、改革（＝「国家永安の法」制定）の正統性を獲得すること、第二に、御用席五人を含む家臣一〇人と「奉告文」に署名し、先祖に改革を誓約することで、改革推進勢力の結束を固めること、これら二点である。養子ではない長孝嫡男康哉にとつて、従来希薄であった藩主の藩政への權威を回復する最も有効な方法は、先祖に対し自らが改革を宣言することであつたと思われる。藩政改革を宣言する「奉告文」において、津山藩初代藩主「源泉公」宣富ではなく、結城秀康を筆頭に据えたのは、秀康は、越前家の祖であるのみならず、「制外の家」と称された歴代のなかで唯一輝かしい存在であり、大村の発言が、康哉に津山松平家が越前家の本流であり、徳川家の元嫡流であるとの自覚を与えたからであると考えられる。康哉は、「奉告文」作成に基づき、安藤・大熊・下村・小須賀・大橋・隅田・大澤・植木・大村・飯室の一〇名からなる改革推進勢力を結成した。そして藩政改革宣言後最初の施策として、十月十六日、来る末年（安永四年）までの「嚴敷儉約」が、飯室・大村の読み聞かせにより発表された。

#### 四 康哉による大澤への改革委任

安永元年五月十九日、二十一歳の康哉は津山に到着した。翌日、飯室・大村も津山入りした。<sup>⑥</sup>六月六日、飯室は康哉に密奏し、家中・町在の困窮が予想以上に甚だしく、「諸有司奸曲」もみられるので、第一に奸曲を排除し、領民が安堵したうえで改革をはじめるべきである。そこで、昨夜大澤に「御為之筋取立」の仕法等について粗々談

説したところ、合点した様子である、と述べた。<sup>(5)</sup>翌七日、康哉は、大澤と飯室を呼び出し、飯室の話した内容について承知したのか、と大澤に尋ねたところ、大澤は如何様にも出精する旨を応えた。この時点において、康哉・大澤・飯室間で、当面の更張新政を見合わせ、奸曲対策の優先に、飯室が中心となつて合意を形成した。

八日、家老安藤造酒助は藩の「暮方」を一年に三万石程度に立て替えたい旨と、年寄就任後暮らし振りが良くなつたとして、下村友右衛門・渡部惣右衛門・小須賀一学・伊達与兵衛、とりわけ下村・渡部の奸曲を申し出た。康哉はこのとき、大澤・飯室に出させ、委細を聞き届けるように命じた。十日、康哉は、家老安藤と大澤・飯室と「経済評論」し、安藤は「選挙書」を提出した。

十一日、康哉は、今まで大村に今度の評議について言い聞かせてはいなかつたけれども、最早粗方の構想が出来上がつたとして、一通り申し聞かせる積もりであつた。しかし、大村には結局、表立つたところを粗々申し聞かせ、そのうえで、康哉は大澤・大村・飯室に黜陟を命じた。そのとき飯室は、「当時不案内」につき黜陟を断つた。先述の上書の検討結果と同様、同じ御側勤であるにもかかわらず、飯室と大村との意志決定への関与の仕方は全く異なる。また、十一日の時点で改革の構想が概ね出来上がったのであるから、明和八年八月二十日の江戸での改革演説、翌日の「奉告文」の段階では、国元における改革の詳細は未決定であつたといえる。

翌十二日、大村は「選挙書」を提出した。しかし、康哉の意に沿わず採用されなかつた。このとき、大澤は清水多橋の試用を提案した。「勤書」によれば、清水は、御金奉行、御蔵奉行、大坂御蔵目付（大坂御屋敷惣駄御目付、御留守居勤向、御金方、東西飛脚取計兼帯）、中奥目付、宗旨奉行・寺社取次兼役を歴任し、当時格式使番勘定奉行在職中で、津山藩の財政に精通した人物であつたと思われる。ところが今度は家老安藤が得心しなかつた。康哉は、大澤に康哉の同意を得ている趣旨を家老安藤に伝えるように指示した。それでも家老安藤は、十五日、清水の数年にわたる奸曲と領民や大坂の銀主等の気受けが悪いことを述べ、康哉に、「自分（康哉）事、弥委任し可相用

哉。我等（康哉とその側近）平生如何存在候哉」と康哉に問うた。則ち、康哉は清水多橋に改革を委任するのか。康哉とその側近は清水試用について平常どのように考えているのかと家老安藤は康哉の所見を糺したのである。それに對し、康哉は「無腹臆、致試用候ハ、其後長大夫其許忤同様ニ致遣候様ニ仕度旨、莊左衛門を以造酒助申聞」かせた。包み隠さず、清水を試用したら、その後大澤を家老安藤等（御用席の意味カ）と同様の待遇にしたい、つまり家老安藤に、改革を清水ではなく、大澤に委任する意向を飯室を通じて伝えたのである。十七日、康哉は、家老安藤が得心しなければ改革が出来ないとして、年寄小須賀一学を媒介に家老安藤を説得し、翌十八日、漸く家老安藤の了承を得、七月二日、清水は「格式物頭勝手省略」を申し付けられ、清水試用問題は解決した。

このように、国入り以後の意志決定には、康哉と家老安藤と大澤・飯室の関与が主にみられた。国元の人事につき、家老安藤の影響力の大きさが窺える。このことは、家老合議制の進展に伴う藩政機構の整備が津山藩でもみられたことを反映していると考えられる。

六月十九日、年寄小須賀は、前日の家老安藤説得を契機に、おそらく改革にかかわる康哉の私的な「評議」への加入を認められた。そこで康哉は、飯室を通じて家老安藤に、年寄山田衛守・伊達与兵衛にも小須賀の件を伝えるように申し聞かせた。ここで注意すべきは、年寄小須賀の私的評議加入につき、家老安藤を通じて年寄山田・伊達に伝えており、国元の御用席、とりわけ家老安藤に配慮していることである。

翌二十日、康哉は、年寄大橋十太夫・渡部惣右衛門・下村友右衛門を罷免し、江戸詰の渡部のかわりに小須賀の江戸派遣を指示した。同日、康哉は、今回の処置について説明するべく江戸家老大熊に直書を発給した。康哉はそれの中で、下村・渡部に対し「渠魁」、大橋に対し「氣之毒」、安藤に対し「安喜」と評価している。

二十一日、大澤長大夫は、大番頭格側用人に就任し、「東西勝手引受并津山町在・大坂役人等迄」の指図を命じられた。大澤の家格は新参であるから、康哉は大澤に就任しうる最高の格式を与えたといえる。この人事について

は、十九日、大澤が「当地不案内」につき、康哉は事前に大目付永井甚大夫・井上弥三兵衛へ諸事を申し合わせるように年寄小須賀に申し付けていた。大村莊助が格式番外郡代に任じられたのはこのときである。二十一日の役替え後、康哉は家老安藤と年寄小須賀・山田・伊達、そして大澤を呼び、改めて改革への協力を要請した。康哉は、大澤に、「此度新役義申付候間、此上万事自分了簡及候丈、諸事取計可申候。乍然、是迄家中引米多、町在は科役金等申付候得は、此上彼等難義不致候様可取計候。〔中略〕此度之儀ニ附候而は、異論加候而は却而成功之妨ニ可成候間、此方方は指図致間敷候間、随分心を用、人才見立次第、親故之疑等無遠慮申立、役義可申付候」と家中・町在にこれ以上の負担を強制しないという意向と従来の積極的な藩政への関与を一変し、事実上改革を大澤に委任する意向を伝えた。康哉の改革に関する基本方針の踏襲を前提とした上で大澤に改革が委任されており、注目される。年寄小須賀・山田・伊達には、下村・渡部罷免につき、「難然止事有之候間、氣之毒ニは存候得共、退役申付候」と説明した。この表現は、昨日の江戸家老大熊への直書とは明らかに相違しており、康哉は年寄に対し動揺しないように配慮したものと思われる。

以上から、康哉国入り後の特徴は次のようになる。まず、国入り後の意志決定には、康哉と家老安藤と大澤・飯室が主に関与し、六月二十一日の大澤側用人就任後、康哉は一変して大澤に改革を委任した。この人事は、事前に康哉が大目付の永井と井上に相談に應じるよう指示したとはいえ、康哉側近に津山の事情を熟知した人物が不在であったから、改革について国元の家臣の理解を得にくかったのではないかと思われる。次に、御用席構成員への配慮、とりわけ家老安藤への配慮が注目される。実際、清水多橋試用問題のさい、康哉の意向を以てしても、家老安藤が了承しなければ、清水を「格式物頭勝手省略」に任じられなかった。また、国入り直後、渡部・下村の奸曲が露頭し、康哉は大橋・渡部・下村三年寄を退役させ、大橋・下村という御用席内の改革基盤の一部を失った。このときも康哉は、他の年寄が動揺しないように配慮している。

「壬辰更張録」にみえる飯室の位置は、康哉の政治顧問であり、腹心であつて、上書の内容と合致する。一方、大村の位置は、康哉の必要に応じて意見を聴取され、是々非々でその意見を採否される立場にあつた。改革の中核を構成したのは明らかに飯室であつた。

## 五 「分職令」と政治堂

八月朔日、大規模な役替えがなされた。<sup>54</sup> 今回の人事で注目されるのは、大目付の井上・永井・鈴木此右衛門が格式小姓頭に昇進し、新しく設置された三奉行のうち、それぞれ市郷兼刑法惣奉行・公辺兼政事惣奉行・勝手惣奉行に任じられたことである。三奉行の設置は、先述のように、大村の発案による大目付の権限拡張を具体化したものといえる。

八月朔日の役替えを受け、十五日、康哉は、「更張分職勤書」を家老安藤に手ずから渡した。同日、「更張分職勤書」に記載のない町奉行以下の「諸役所属役之分チ」は三奉行役所にて政事惣奉行永井より申し渡された。<sup>55</sup> 翌日、「勤方書」を「分職令」、「属役支配書」を「分職録」と改名し、ここに「分職令」・「分職録」が制定された。この二書は御用席・政事惣奉行・大目付と江戸御用席・江戸大目付・奏者番へ一部ずつ渡された。「分職令」は、鈴木と相談しつつ、飯室によって起草されたものである。<sup>56</sup>

続いて、「分職令」の分析に移る。「分職令」は、家老・年寄・奏者番・寺社奉行・大番頭・公辺兼政事惣奉行・市郷兼刑法惣奉行・勝手惣奉行・大目付・側用人・扈從頭、以上十一の役職を対象に制定された。各役職にほぼ共通する特質は、「政事ハ定りたる常法ハ即日到家老へ達して行へし」(年寄の箇所)等の迅速な意志決定、「年寄以下諸長官の才能を選て官を命し、殿最を課して、黜陟・賞罰用捨有へからず」(家老の箇所)等の人才登用、「支配ものの受前之役筋ハ、手を下しいろわす、全く当職之者に委任し」(年寄の箇所)等の支配の者への委任、「政事都



て奢侈・美麗を禁し、省略・質素專一にすへし」(年寄の箇所)等の儉約、共通文言「公私の掟を(堅く)守り」または「守へし」という法令遵守、文末の共通文言「役向記録明白にすへき者也」という役向き記録作成義務の六点である。よって、「分職令」制定の目的は、これら六点の藩政機構への徹底にあったと考えられる。特に、職務内容・「役向記録」の明文化や法令遵守は、法令・先例に重心を置く藩政機構への転換を意図していたといえる。残念ながら今日、「分職録」は現存してはいないけれども、「分職令」と同じ方向性を持っていたと思われる。八月朔日の役替えも、「分職令」制定も、表向き康哉の意向が強く反映されているようにみえる。しかし、前述の清水多橋試用問題、御用席への配慮からすると、実際は康哉と御用席との協調によって実現したと考えられる。

次に、今回新設置の三奉行等の職務について検討する。政事・刑法惣奉行には、先例・諸法令の習熟を命じている。政事惣奉行は他に、家中の系譜・分限、城郭・田野等の諸図の習読や、「文武・諸芸・講場」を総領し、家中の出席帳を作成して年寄への提出を担当する役職であった。刑法惣奉行は町奉行・郡代等を統括する役職であった。側用人は「朝夕左右に侍し評論・論議」をするのみならず、「富強への道を専任」し、「毎月初属役より出す所の会計帳吟味明白に致し、年寄へ出すへし」と会計監査を担当する役職であった。勝手惣奉行は側用人を補佐し、「日用の出納清廉に致し、会計帳明白に記させ、月末に至り取集、審実に吟味致し、翌月はしめ、側用人へ出すへし」と側用人の会計監査の補佐役でもあった。側用人・勝手惣奉行によって実施される会計監査は、毎月末に帳簿を提出させるという厳格なものである。この三奉行設置は、前述の飯室の「月番持」ちの悪弊の指摘を反映させたものといえる。

以上の職務内容の検討を踏まえ、「勤書」から就任者について改めてみてみると、政事惣奉行の永井は勘定奉行・町奉行歴任者であり、刑法惣奉行の井上は郡代・町奉行歴任者であるから、津山の事情にも通じていたと思われる。一方、側用人の大澤は前述のように、国元に不案内であった。鈴木も、小納戸(大澤跡役)、大目付を経て

勝手惣奉行に就任した康哉側近の出身である。これにより、康哉は信頼の置ける側近に藩の財政部門を委任したといえる。しかし、大澤・鈴木は経歴からみて当時の津山藩財政に通じていたとは考えにくく、財政部門の脆弱性を指摘できる。実際、安永元年九月二十三日、刑法惣奉行の井上により、大澤・鈴木が勝手向きについて承知しておらず、行く末を計らい難いと危惧の念が表明された。その一年後の翌二年九月二十九日、大澤が側用人に在職中であるにもかかわらず、かつて宝暦改革の中心人物であつた佐々木三郎右衛門が御勝手向惣請込に任命された。<sup>57</sup>年寄伊達与兵衛は佐々木について勘定奉行に、「三郎右衛門殿、世上広キ事ニも御坐候故、是迄之通銀主之外ニも、宜銀主共有之候ハ、懸合有之候様ニも有御坐度」<sup>58</sup>いと述べており、この人事は佐々木の銀主開拓手腕に期待したものであつたといえる。

なお、「分職令」によれば、大村莊助が権限拡張を提言した大目付の職務は、藩政全般にわたる監察と、有事のさいには年寄に上申、または藩主への直奏が認められている。改革以前の大目付の職務は必ずしも明確ではないけれども、概ね同内容であつたと考えられる。

「分職令」・「分職録」構想とともに、政事堂構想も、八月以前の段階で進行していた。政事堂とは、津山城中の醗醗間と宇治橋間の二間を一間にしたものであつた。<sup>59</sup>「壬辰更張録」八月三日条に記されている「掟書」によると、政事堂における評議は、毎日巳の正刻から午の上刻まで、家老・年寄・諸長官列座のうえ開催された。従来は、御用席が御用所において（藩主在国時には藩主も参加して）審議し、必要に応じて各奉行を呼び出し、意志決定を行つていた。よつて、この政事堂設置は、彼らの恣意を排除し、迅速な意志決定を実現させる目的があつたと思われる。政事堂には、先例・諸法令の熟知を役務とする政事・刑法惣奉行も列座したから、彼らによつて、御用席の恣意排除・権威の低下を一層促進させる意図があつたと考えられる。また、「分職令」において年寄支配の大目付に直奏を認めたこともこれらと無関係ではあるまい。

七月二十日、康哉は家老安藤に政事堂設置を申し渡した。しかし、九月十一日、家老安藤と年寄伊達・山田は、「政事堂で」座を隔て、家老以下六長官・大目附致列坐、於目通取捌申渡置候所、安藤造酒助・山田衛守・伊達与兵衛罷出、致密語候ハ、今度更張二付、人才選候事二而、諸政即時断決致し候様二相成候所、用席之者、不才二而、取捌之所難計候。且又、留守年抔は別而無心許、属役等も数度之諸難等有之候節、応対不束二有之候而ハ、甚以手薄二有之候故、是迄之通、於用所政事行ヒ度<sup>60</sup>い、と政事堂設置に反対した。その理由は、「人才」を選んで迅速な意志決定は確かに実現したけれども、御用席の者は才能に乏しく、取り捌きが困難であり、属役への応対が不十分となれば政治が手薄になるからであるという。つまり、御用席が政事堂政治に対応できないというのである。そのとき康哉は、考えて返答するといった。結局、十八日、当分見合わせる旨、家老安藤と年寄伊達・山田に伝えた。御用席の理解が得られず、政事堂構想は事実上頓挫した。

家老安藤と年寄伊達・山田反発の背景には、第一に、「分職令」までは御用席について特に規定はなかったものの、今回の政事堂設置は、従来の御用席政治を否定するものであり、御用席權威の低下を危惧したこと、第二に、改革の中核に、津山や財政に不案内な人物を据えていることへの反発があったと考えられる。後者については、八月二十九日、大澤は大坂出立にさいし、奥田文右衛門他下級藩士五名の家老安藤への接近を危険視し、飯室に彼等の計策を取り上げないように発言している。十一月四日、明和七年八月十二日以来、藩主在国時の御用日は月に十二日であったのが、月に二十日へと日数増加が実現した。これは、康哉と御用席との合意による政事堂見送りの代替としての意味を持つと思われる。この時点で、御用席權威の低下と藩主權威の回復が一定程度実現していたのではないだろうか。<sup>(61)</sup>

## 六 「申渡十一箇条」・「問九ヶ条」と「郷中御条目」の改正

十月七日、康哉より「申渡十一箇条」・「問九ヶ条」が家老安藤に渡された。

「申渡十一箇条」は、「分職令」に記された役向き記録編纂の詳細を指示したもので、御用席・奏者所・寺社奉行所・大番頭所・側用人兼扈從頭所・公辺惣奉行兼政事惣奉行所・市郷惣奉行兼刑法惣奉行所・勝手惣奉行所の八役所に対し、それぞれの役務にに応じて「後來例格に可成類、旧記中より致抄出、可仕立」(大番頭所の箇所)と命じている。この背景には、前述の「古格」を知らない勘定奉行や家督相続の定法を取り違えた御用席の存在<sup>63</sup>があったと思われる。注目すべきは、御用席に、「軍賦人数帳」の作成をはじめとする武備の編成と、「家老以下足輕に至迄、由緒書・親類書・縁類書・遠類書」の編纂を命じていることである。武備については後述する。「由緒書」等の編纂には、藩士が家の由緒を書き出すことで、津山藩への帰属を再認識させ、津山藩家臣団としての団結を促す意図があったものと思われる。「由緒書」以下の諸書は、安永改革の特質の一つである黜陟の実践や人事管理、現状・来歴把握においても、また大村の説く「全備之御制度」確立においても不可欠な記録である。「由緒書」等の編纂については、「分職令」における政事惣奉行の職務規定のなかに、家臣の系譜の熟知を命じた文言が存在することとも無関係ではあるまい。<sup>(63)</sup>

「問九ヶ条」は、藩主から家中への諮問内容を箇条書きしたものである。

## 問九ヶ条

一、邦内農民を増候事。

一、洗竹子之蔽を改候事。

富強之術を行ひ候ニハ、右二ヶ条急務与存候。諸役人ハ勿論、広く下し、計策相尋、銘々存寄入札ニも致し

出候様ニ可申付候。此二計不立内ハ、何程新改候共、無益与存候。

一、邦内物価減計策之事。

附、商賈之者、次第ニ農人に帰候仕方之事。

是又治国之基ニ候。計策広く可求候。

一、陽山を見立、材木ニ成候樹之種下し候事。

二十年内ニハ、城内修覆茂可申付候。其時ニ至り、他国<sup>カ</sup>材木集候ハ、甚薄成事ニ而、国恥ニ有之候。只今<sup>カ</sup>心懸候ハ、間ニ合可申存候。

一、農業之妨ニ不成山を見立、牧場立、試ニ牛馬畜候事。

土地ニ宜哉否ハ不被計候得共、不成事存し、捨置候事ハ無念ニ存候。不成迄茂、試度候存寄之通□□得者は、軍賦之為ニ成候。且又国益ニ成、甚敷利有之候半与存候。

一、町奉行附足輕を止め、寺社奉行・町奉行・郡代三ヶ所之持ニ致候而は如何可有之哉。

一、寺社取次、一月二両・三度不時ニ寺社見廻り候事。

一、町奉行、一月二六・七度不時ニ町中見廻り候事。

一、郡代、一月二両・三度不時ニ郷中見廻り候事。

右四ヶ条之通申付候而は如何可有之哉。足輕三ヶ所之持ニ致候ハ、右見廻り之節召連候ニも弁利と存候。

三奉行如此不時ニ見廻り、不法之徒見当次第召捕ニ致し、吟味も致候ハ、自然と風俗茂改り、職業ニ厚くなり可申存候。

右九ヶ条、致評議、銘々存寄早々可申聞候也。

第一条の背景には、当時の津山藩領における人口減少があったと思われる。五万石時代の津山藩では、寛延三年

(一七五〇)に二万九六〇一人いた人口が、明和五年(一七六八)には二万八〇二四人、率にして約五・三%減少した。<sup>(65)</sup> 第二条は間引き・墮胎による人口抑制をなくす方策、第三条は藩による領内の物価統制策、第四条は城内修覆に使用する材木の植林案、第五条は牛馬の牧場設立案を求めたものである。「富強之術」実施には、人口増加が不可欠であり、牧場での牛馬飼育は、「軍賦」のみならず、「国益」にもなるという発想がみられ、「富強之術」実践を模索する様子が窺える。「申渡十一箇条」における武備と「問九ヶ条」の最後の四箇条の足輕については、康哉が永見(安藤)と大熊に宛てた安永四年か六年頃と推定される書状に言及があり、これらの条文には、康哉の意向が強く反映されているのではないかと思われる。この「問九ヶ条」への回答書として、安永二年正月十四日付けの大村の「御尋之条々御答書」が唯一現存する。<sup>(67)</sup> 他に、政事惣奉行永井甚大夫も提出した。<sup>(68)</sup>

安永二年閏三月には、大村の発案により、「郷中御条目」の改正がなされ、条文の削減と読み聞かせの徹底がはかられた。大村は、改正の経緯について、在方の者は本来ならば聞き漏らさないであろう「手紙之願并割符之事」を知らず、「御条目」の内容に疎い。そこで、「姦曲」の役人が意図的に都合の悪い箇条をもらしているのではないかと考え、村々の写本を郡代所で校合して村に返し、手習い等を通じて条目の内容を周知徹底すべきであると刑法惣奉行井上弥三兵衛に申し上げたところ、了承されたと述べている。<sup>(69)</sup>

下役人の不正については、前述の明和七年以来、勘定奉行四人が町奉行・郡代を兼帯し、大村の先役の栗原新五兵衛も町奉行と郡代を兼帯したことが、当該期郡代の下役人への統率力低下を招来した一つの要因であると思われる。

なお、改正された「郷中御条目」(全六〇条)は、「津山温知会誌」<sup>(70)</sup>に所収されており、奥書には、「右写可差出候。相改加印形相渡可申候。其上に而者役人に不限写之、常々若者共江読聞、手習をも致候者には、無用之往来物等を差置、御条目を手習、又者素読に致させ可申候。左候は、自然と御条目之旨を会得致へき事に候」とあり、

大村の意向は概ね実現したといえる。因みに大村が問題視していた部分については、第十五条に「凡諸願届」として、第十四条に「免割并納所諸入用等之儀」としてそれぞれ規定がみられる。

そのほかに、「御用日記」〔町奉行日記〕によれば、安永元年八月、蛸笛が設置されて、御用席を媒介することなく、直接藩主康哉が世上問題を把握しようとした。財政政策としては、安永元年七月八日、塩一俵につき銀一分ずつ、十八日には、綿実一本につき銀二匁五分ずつ、繰綿一本につき川下だしは銀一匁、陸荷は銀五分の運上を課している。いかほどの成果があったかは、定かではない。

## 七 改革の結末

安永改革はいかなる結末を迎えたのであろうか。前掲の安永三年五月十五日付けの飯室の「密奏」を中心に、その後の改革の展開について検討する。

飯室は、現状を次のように認識している。「吾 君更張之令を下し給ふ事、今已に四年なれとも、新法立たるまゝにて、いま一令の行わるゝ事なき」と、続けて、「されハ、新政今已に三年なれ共、行われぬハ強ち為政・大夫の聖賢ならざる所為はかりにもなし」という。飯室によれば、更張新政は停滞しており、改革が実現しないのは、御用席のみに原因があるとはいえないとする。これは、康哉の「師」であり、「腹心」であり、「顧問」である飯室にしかできない諫言であるといえる。

それではどのような原因があるのか。飯室は一五の項目に分けて言及する。以下に項目を記し、重要と思われる部分について詳細に検討する。「第一に、君として臣下を疑是なり」、「第二に、君、修練せる技芸有る是なり」、「第三に、危道を政事の上に用る是なり」、「第四に、人才を撓て、自身の物好に合さする是なり」、「第五に、人を教て遣ふ是なり」、「第六に、大義一たひ立て、衆小に謀及ふ是なり」、「第七に、弁舌を好みて言を洩す是なり」、

「第八に、臣下を卑しミ見る是なり」、「第九に、委任の道立さる是なり」、「第十に、聖賢を信せず、古書に暗き是なり」、「第十一に、人を殺して遣ふ是なり」、「第十二に、相たる者、君を疑ふ是なり」、「第十三に、為政・大夫、下の風俗を曲尺にして、上の令を遏トマスく是なり」、「第十四に、為政・從政二大夫、下言を入用さる是なり」、「第十五に、為政・大夫、有才を遣ひ難んする是なり」、以上である。第十二・十三・十四は御用席批判であるけれども、それ以外の原因は藩主の藩政への関与の仕方にあるとする飯室の意見は注目すべきであろう。

ここでは、第九の「委任」について検討する。飯室は、「上より委任し給ふとハ有れど、何か一物有りて、手放し給わぬやうに有れば、委任を受ける者も全く役に身を打はめず、預り物したるやうに万事内端にいたす所より麁相も仕、落も出来る。是臣の智慮すくなきにハ非ず。智慮を上のきけんを伺ふに用ひて、官事に用さる故なり」、また、「委任したる者の心まかせにしてちと見にくき事ありとも、目をふさぎ、口をおさへて、たゞなり行の所はかりに心つけて、大基本の所□□はつれ候ハ、其者の得手なるものにまかすへきなり」という。飯室は、一度「委任」したら、その者に「手放し」、「たゞなり行」きに留意しなければならぬと康哉を諫めている。確かに康哉は、大澤に改革を「委任」した。しかし、その後も、康哉は「問九ヶ条」等藩政への関与を続けた。その結果、大澤は康哉と御用席との板挟みにあい、更張新政の実現に苦慮したものとと思われる。そして、飯室は、「更張の政術立給わんとならハ、いかにも御仁信を厚くつとめさせ給ひ、為政・太夫へしかと御委任なし給」うべきであるという。則ち更張新政を実現したのであれば、康哉自身は仁信を厚くして、御用席に改革を「委任」するべきであると結論を述べる。

ここで注意すべきは、飯室が、大澤ではなく、御用席に改革を「委任」するように指示していることである。「勤書」によれば、康哉は、安永二年閏三月朔日、家老大熊勘解由に「分職二付、御新政之義御委任」し、同年十一月朔日、家老永見（安藤）造酒助と年寄小須賀一学に「御勝手懸り」を命じ、同三年正月十六日、大澤の側用人



の役を解き、格式は今まで通りのまま奏者番に、同年正月二十一日、佐々木三郎右衛門に代わって年寄小須賀に「御勝手惣呑込」を命じた時期にあたる。佐々木は同じ日、「御勝手懸り」に役替えとなった。<sup>(7)</sup>すなわち、飯室が、大澤ではなく、御用席に改革を「委任」するように指示した背景には、飯室が「密奏」を提出した安永三年五月段階は、改革の主導権が、大澤から御用席と宝曆改革の旧勢力へと転換した時期であったからであると考えられる。大澤は、安永元年六月二十一日の側用人就任から、家老大熊が改革を「委任」される安永二年閏三月朔日までの九ヶ月余りで事実上改革の主導権を失ったことになる。その後、同年九月九日、大澤は側用人に帰役した。しかし、康哉は、当時家老大熊に改革を「委任」し、年寄小須賀に財政部門を担当させていたから、大澤には、安永元年の改革当初のような財政部門における権限をものはや付与しなかったのではないだろうか。これにより、前述の、改革の具体案を指示する内容の書状が、康哉から、大澤ではなく、家老永見（安藤）・大熊に宛てられている理由も理解できる。

それでは康哉は、なぜ大澤から家老大熊へと改革「委任」者を変更したのであろうか。

第一に、井上弥三兵衛の指摘に象徴されるように、大澤長大夫と鈴木此右衛門両名の財政部門担当者の脆弱性により、「分職令」に規定された三奉行制の一角が崩壊したこと、第二に、御用席の政事堂反対により、御用所ではなく政事堂を中核に据えた藩政機構の転換が不可能となったのみならず、御用席との改革に関する協力関係維持に支障をきたし兼ねなかつたこと、これら二点を指摘できる。これら二点から、当初の大澤を中心とする改革推進が困難となり、康哉は、より御用席の協力を得やすく、より実現可能な政治主体の再編成を余儀なくされ、康哉の信頼の厚い家老大熊勘解由に改革を委任し、清水多橘を「格式物頭勝手省略」に任用するさい、家老安藤造酒助を説得し、康哉の「評議」への参加を許された年寄小須賀一学と独自の改革案をもつ家老永見（安藤）造酒助、銀主開拓手腕をもつ佐々木三郎右衛門の三名に財政部門を担当させたといえる。

また、飯室は、「わけて、他の邦君へ御家政の御質問はなきも宜しかるへし。御手薄にも聞へ、朝に人なきにもにて、誠の国耻なるへし。その上他邦の治策ハ、たとひ善事なるも、風土異なると、国の大小によりてハ、成典の害となり、問て用されハ、義を失ふ。此所御賢慮願奉りぬ」と述べ、康哉の「御家政」に関する他大名への相談を戒める。これは、冒頭で指摘した細川重賢・上杉治憲らとの交流に関係していると思われ、注目される。<sup>(75)</sup>この発言と第七は、冒頭で紹介した松平定信の康哉評である「博学弁才無双」<sup>(76)</sup>とも無関係ではあるまい。他大名に藩政について相談し、「博学弁才無双」である藩主康哉の藩政への関与の仕方が、結果として裏目に出て、安永改革実現の障壁になったのではないだろうか。<sup>(78)</sup>

### おわりに

津山藩安永改革は、歳入増に力点を置く財政改革であつた宝暦改革の失敗の後実施された、儉約、藩政機構の改編、記録・法令整備、文武奨励等の特徴とする藩政改革であつた。

「分職令」、政治堂、「全備之御制度」、「記録役所」等の構想は先例に判断の重点を置く藩政を指向しており、御用席権力の低下と意志決定の迅速化・円滑化を意図していた。<sup>(76)</sup>江藤彰彦氏によれば、福岡藩では明和期、藩政記録の系統的蓄積、参照を可能とする体制の確立がみられ、前述のように、吉永昭氏は、宝暦・明和・安永期の藩政改革の特徴として、「支配機構の改革と並んで法令の整備」を指摘されており、<sup>(77)</sup>藩政機構が整備されてくる近世中後期、記録整備の問題は、藩政の新たな課題として浮上したものと思われる。

大村莊助は、藩政改革にあたり、康哉に、津山松平家は「国家之御嫡流」であり、「天下之主」となるべき家であつたけれども、今となつては如何ともし難いから、今の家格を守つて「天下之望」<sup>(78)</sup>みとなれ、と津山松平家当主としての心構えを説いた。大村の発言は、康哉に津山松平家が越前家の本流であり、徳川家の元嫡流であるとの

自覚を与え、藩政改革を宣言する「奉告文」中に、津山藩初代藩主「源泉公」宣富ではなく、越前家の祖であり、「制外の家」と称された、先祖のなかで唯一輝かしい存在であった秀康を筆頭に据えたものと思われる。元嫡流としての自負が改革勢力の結束を固める役割を果たしたともいえる。この大村の発言の背景には、一橋家からの養子迎え入れによる家格上昇と結城秀康の血統途絶という当時の幕府と越前松平家の関係、そして飯室への対抗意識があったのではないか。

安永元年、三度目の国入り直後の意志決定には、康哉と家老安藤と大澤・飯室が主に関与した。しかし津山の事情に通じていない大澤・鈴木・飯室は、国元において不安定な立場にあった。それゆえ彼らによって構想された改革案は、財政部門を実務経験皆無の大澤・鈴木が担当する等、国元の家臣（特に御用席）の理解を得にくいものであった。家老安藤と年寄伊達・山田の政事堂反対、井上の大澤・鈴木批判は、康哉側近に対する不満の噴出であったと思われる。

しかし、康哉が特に配慮した家老安藤にしても、改革自体に反対していたわけではなかった。よって、米沢藩における七家騒動<sup>⑧</sup>のような改革自体に関する根本的対立は、津山藩ではみられず、改革路線に関わる対立があったに過ぎなかった。その原因は、「奉告文」署名段階、則ち改革の前段階で署名者間にあったのは、改革気運の共有に過ぎず、何の合意も形成していなかったからであると思われる。

康哉は、大澤の側用人就任後、国元において大澤に改革を「委任」し、それまでの藩政への積極的関与を一変させた。大澤と改革の中核に位置した鈴木・飯室は、康哉の基本方針を受け、儉約と藩政機構改革を実施した。しかし、儉約と機構改革それ自体が安永改革の目的であったとは考えにくい。なぜならば、大澤の就任した側用人の職務が「富強の道を専任」するものでり、「問九ヶ条」中に「富強之術」実施を意図する文言がある以上、安永改革の目的は、津山藩の「富強」にあった筈であるからである。よって、彼らの着手した儉約と藩政機構改革は、「富

強」実現への基盤作りとしての位置にあったと考えられる。しかし、一旦大澤に改革を「委任」したにもかかわらず、大澤・鈴木両名の財政部門担当者としての脆弱性、御用席による政事堂反対、「問九ヶ条」にみられるように康哉自身による藩政への関与の継続が改革実現の障壁となった。その後、康哉は大澤から家老大熊へと改革「委任」者を変更し、鈴木から年寄小須賀・家老永見（安藤）と佐々木に財政部門担当者も変更した。これにより、改革路線が、「分職令」、政事堂等の構想実現から結局旧体制に復帰した。近世中期の藩政改革では、藩主の藩政への関与の在り方として、家臣への委任体制を構築し、それを維持することが、改革実現の成否を左右する重要な意味を持っていたと思われる。康哉の場合、吉村氏重賢像とは異なり、改革「委任」後も藩政に関与し、他大名への藩政の相談を継続した。その結果、安永改革は頓挫し、一方で遅くとも天明期、後の寛政改革を主導する松平定信等との交流を深め、「博学弁才無双」との評価を得るに至ったのではないだろうか。

最後に、津山藩における家門ないし元嫡流意識の藩政への影響の問題について、本稿では、今後の津山藩政史上の重要課題の一つとして問題を提起するに留めておきたい。その後の康哉期藩政の動向についても今後の課題としたい。

## 註

- (1) 藤田覚編『幕藩制改革の展開』（山川出版社、二〇〇一年）等。
- (2) 笠谷和比古『主君「押込」の構造―近世大名と家臣団―』（平凡社、一九八八年）
- (3) 中期藩政改革を「名君賢宰型」と位置づける従来の研究に対し、藩政改革における「領主・家臣団内部の対立と抗争」を重視しようとする長野暹氏の研究にしても、
- (4) 前掲笠谷氏、四一頁。
- (5) 福田千鶴「幕藩制的秩序の形成―藩政確立をめぐる諸問題―」（山本博文編『新しい近世史』第一巻、国家と秩序、新人物往来社、一九九六年）、後、『幕藩制的秩序の形成と御家騒動』（校倉書房、一九九九年）所収

藩主主導の内実が明確であるとは言い難い（『藩政改革論』講座日本近世史』5 宝暦・天明の政治と社会有斐閣、一九八八年、二二六頁）。

(6) 吉村豊雄「細川重賢と宝暦の改革の評価をめぐる」

『市史研究くまもと』第二一号、二〇〇〇年、七二頁。

なお、この論考は、講演録という性格上、問題提起に留まっており、吉村氏の議論は実証の余地を残している。

(7) はじめ康哉と称し、天明五年康哉に改名する。以下、本稿では康哉に統一する。

(8) 「宇下人言」(『宇下人言・修行録』所収、岩波書店、一九三二年)には、「このとき細川故越中守・松平

越後守などにいとねもごに交りて経済の事なかたりあふ」(天明四年条、五八頁)、また、「在国中成功もありしかば、みなみなうちつどひて、『その事きかまほし』、いかにしてかよからん」『政はいかゞ』と日々のやうに、松平紀伊守・本弾正・肥後・戸采女正・松平伊豆守・堀田豊前守・加納備中守・牧野備前守・牧野佐渡守・松平越後守・奥平大膳大夫らみなくしたひきて刎頸の交をなす」(天明五年条、六七頁)とある。このように康哉は、松平定信のみならず、彼とともに寛政改革を推進した本多忠籌・松平信明・戸田氏教とも親密であつたことが窺える。

稲垣茂松「墮涙口碑」(文政十二年、『津山温知会誌』

第一編所収、一九〇八年)には、「其節賢明の間へ御座候諸侯達といつれも御懇意被遊候よし。細川故少将殿重賢・上杉故侍從殿治憲杯と御同席(大広間)にて、別て御交誼深く被為人、毎々御政務御相談に御往来、又は御文通等御座候」(二二・二三頁)とある。

(9) 前掲「宇下人言」天明六年条、六九頁。

(10) 渡部武『津山町奉行』第四編「更張策と新政」(広陽本社、一九八一年)五九〜七六頁。

(11) 『岡山県史』(第八巻 近世Ⅲ、岡山県史編纂委員会、山陽新聞社、一九八七年)六〇〜六五頁。

(12) 『津山市史』第五章第二節「藩主康哉の新政」(第四巻 近世Ⅱ―松平藩時代)、津山市史編さん委員会、広陽本社、一九九五年)二三四〜二五一頁。

(13) 吉永昭「国産奨励と藩政改革」(『岩波講座日本歴史』

11 近世3 岩波書店、一九七六年)四三・四頁。

(14) 「江戸日記」享保十一年十一月十八日条、愛山文庫、津山郷土博物館所蔵。

(15) 大竹秀男「津山藩の「新法変格」―宝暦の藩政改革―」(『法と刑罰の歴史的考察』、平松義郎博士追悼論文編集委員会、名古屋大学出版会、一九八七年)に詳し

い。

(16) 以上の出典は全て「江戸日記」。

(17) 『徳川諸家系譜』四、一一五頁。

(18) 「江戸日記」明和六年五月朔日条。

(19) 同右、明和八年六月二十七日条。

(20) 「町方諸事以後留」明和八年六月条、玉置家文庫、津山郷土博物館寄託。

(21) 「江戸日記」安永元年二月二十九日条。

(22) 「日記」(『国元日記』安永元年三月十九日条、愛山文庫、津山郷土博物館所蔵。

(23) 同右、安永元年五月九日条。

(24) 同右、明和五年六月二十六日条。

(25) 「御用日記」〔町奉行日記〕明和五年十二月三日条、愛山文庫、津山郷土博物館所蔵。

(26) 「日記」〔国元日記〕明和五年九月十八日条。

(27) 同右、寛保二年十一月十五日条。

(28) 「御用日記」〔町奉行日記〕明和五年九月二十五日条。

(29) 以下、役替えに関する出典は「日記」〔国元日記〕による。

(30) 「老人伝聞録」〔津山温知会誌〕第一編所収、津山温知会、一九〇八年〕三・四頁。この史料は、慶応二年（一八六六）、津山藩士馬場貞観が編纂した津山藩士等の伝記である。

(31) 「勤書」とは、津山藩士の奉公書の総称であり、大別すると御譜代・古参・新参の家格別に編纂されている。現在、百二十冊余りが伝存する。愛山文庫、津山郷土博物館所蔵。

(32) 「老人伝聞録」大熊勘解由の項目に、「大熊勘解由死去のとき」公（康哉）被仰けるは、我片腕を落したり。此人存命ならば、我無為にして国治り、領分のものゝ為になるべきに。嗚呼、天我を亡せり、と慟哭し給ぬ。卒する年三十計、可惜人なりき」（六頁）とある。

(33) 「御用日記」〔町奉行日記〕明和五年十二月十四日条。

(34) 同右、明和七年六月二十七日条。

(35) 同右、明和七年閏六月九日条、同年七月二十二日条。

(36) 武藤殿男他編『肥後先哲偉蹟』（歴史図書社、一九七一年）五二四～五二七頁。

(37) 津山藩の学問所設置について、詳細は不明であるけれ

ども、当時十四歳で、未だ初入りを果たしていない康哉よりも、佐久間・安藤両家老政権の主導に依る部分が大きかったのではないかと思われる。おそらく、大村莊助の招聘についても同様であろう。なお、前掲「老人伝聞録」佐久間主計の項目（一頁）に、佐久間主計は、佐久間家に養子に入る以前、大坂に学問修行しており、学問好きで書籍を多く所蔵していたと記されている。

(38) 笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』下（吉川弘文館、一九七〇年）一一一八頁。

(39) 前掲「老人伝聞録」大村庄助の項目、二三頁。

(40) 「江戸日記」明和五年十月五日条、同七年二月二日条、同八年七月十八日条。なお、飯室の「勤書」は現存しない。飯室招聘については、後述のような飯室・大村と康哉との関係からして、大村招聘よりも康哉の意向が強く働いたものと考えられる。

(41) 愛山文庫、津山郷土博物館所蔵。

(42) 愛山文庫、津山郷土博物館所蔵。

(43) 愛山文庫、津山郷土博物館所蔵。

(44) 愛山文庫、津山郷土博物館所蔵。日付は八月である。文中に「津山ニ而当春差上候書上」とあるから、康哉の初入りの年である明和五年以後である。文中で大村は、下村友右衛門に役儀を申し付けるようにとの意見を述べている。下村は、後述のように、安永元年六月二十日に罷免されるから、安永元年八月以前である。文中に、

「家老大熊勘解由を」来春御国江被召連、（家老安藤）造酒之助と被組合候事、可然かと奉存候」とあるから、

八月当時康哉と大熊が江戸に居た年の史料である。「勤書」によれば、大村は明和六年も春津山に居た。

「勤書」によれば、大熊は、明和六年八月、津山に居り、明和八年八月、江戸に居る。以上から、明和八年の史料であると推定した。

- (45) 以上の出典は、『福井県史』通史編四 近世二(福井県、一九九六年) 六六・六七頁。

- (46) 役替えの出典は、『江戸日記』である。

- (47) 「壬辰更張録」安永元年六月二十日条(愛山文庫、津山郷土博物館所蔵)の康哉から大熊宛ての直書写しに、「長太夫事、去年来被見及候通、深切二取計候間、是又別紙之通役義申付、切々等為致可申存候」との一文がある。

- (48) 「江戸日記」明和八年八月二十日条。

- (49) 同右、明和八年九月二日条。

- (50) 「御家格附属津山藩臣之部」(愛山文庫、津山郷土博物館所蔵)。

- (51) 以上の出典は、『日記』(国元日記)である。

- (52) 「壬申更張録」安永元年六月六日条。以下、特に註記しない事実の出典はこれである。

- (53) 「懷旧隨筆」(序、一九〇九年)『津山温知会誌』第一編、津山温知会、一九二〇年)に、「平土の家に於ては一番頭を極官とし」(八八頁)、「古参以下平土」(八七頁)との記述がある。大澤の家は「新参」であつたから、「平土」の位置にあつたと考えられる。

- (54) 「御政事奉行日記」安永元年八月朔日条、愛山文庫、

津山郷土博物館所蔵。

- (55) 「御用日記」(町奉行日記)安永元年八月十五日条。

- (56) 「壬辰更張録」六月二十一日条、「分職令」は愛山文庫、津山郷土博物館所蔵。

- (57) 「江戸日記」安永二年九月二十九日条。

- (58) 「御用日記」(勘定奉行日記)安永二年十二月三日条、愛山文庫、津山郷土博物館所蔵。

- (59) 「壬辰更張録」安永元年七月二十日条。

- (60) 「壬申更張録」安永元年九月十一日条。

- (61) 前掲「老人伝聞録」小嶋新五右衛門(此母)・赤見類助の項目に、「兩人(小島此母・赤見類助)大目付相勤候節、公(康哉)御側江召て被仰けるは、當時用所の權威甚重く、我申出す事理に当り候事にも多不取用。其方兩人用所にて無理なる事申出なば、手強く相争ひ、決して随順する事なかれ、と被仰ける。自是兩人能命を守て被相勤ける。御用所より、兩人の強頑なるを惡て、毎度役免の義被申立候得共、御頓着不。公又兩人を召て、用所共、初の權威と違ひ、我申出能取用ゆ。今我權威を取戻したり。此後、是迄の様手強く申張にも及申さずと被仰聞(以下略)」(一三・一四頁)との記述がある。「勤書」によれば、赤見は大目付就任以前、「御近習勤」、刀番、小納戸を、同様に小嶋は「御近習勤」、膳番、中奥目付を歴任しており、兩人とも大目付就任以前は康哉の側近であつたといえる。彼等兩名が共に大目付に在任した期間は、安永元年八月朔日から同年十月十四日であるから、御用日数増加以前、御用席權威の低下と、藩主

権威の回復がある程度実現していたのではないだろうか。

(62) 「壬辰更張録」安永元年八月九日条。

(63) なお、現存する「勤書」の稿本を検討された小島徹氏は、「勤書」の編纂開始時期を明和・安永年間と推定されている（「津山松平藩士の「勤書」に関する一考察」

「津山郷土博物館紀要」第一号、一九九八年）。しかし、康哉藩主在任中の天明六年（一七八六）六月二十三日、平井郷左衛門・大山郡太夫・大村莊助の三人は、「御家中家筋調」を命じられ（「日記」（国元日記））、寛政元年（一七八九）正月十八日、「勤書帳」及び「断絶者記帳」等の記載方法や管理先を記した書付が御用所から渡されている（「日記」（国元日記））。このようにみても、このとき指示された「由緒書」等の編纂事業は、何らかの理由で頓挫したものと思われる。

(64) 「壬辰更張録」安永元年十月七日条。

(65) 「津山松平領の人口」（津山郷土館、一九八二年）一頁。

(66) 前掲「御家格附属津山藩臣之部」所収。日付は十二月十三日である。「勤書」によると、安藤が永見に改姓したのは安永二年閏三月九日であり、大熊の死去は天明元年八月二日である。文中に「帰城之上申談」とあるから、差出人の康哉は江戸におり、宛所の永見・大熊は国元にいたといえる。これらの条件を満たすのは、「勤書」によれば、安永四年と六年であるから、この兩年のうちどちらかであると推定した。

まず、武備について、康哉は、「御当家を初、諸家武家八、武之名之官二て、諸文事勤居候へは、其強き所う

しなわさる方可被宜候かと被存候」と述べており、武家の本分を喪失しない方がよいという康哉の意志が窺える。「申渡十一箇条」において、康哉が御用席に武備の編成を命じたのは、このことと無関係ではあるまい。

康哉は、正室の実家である井伊家の足軽について言及し、中間ではなく、足軽の増員による江戸の経費節減案を提示し、国元の永見（安藤）・大熊に検討を命じている。「問九ヶ条」の足軽に関する言及も、足軽の有効活用という点では、同様の発想に基づいていると思われる。

また、書状中には国産の言及もみられ、「何とそ追々二ハ、国産ニて暮し候様ニ有之度事ニ而、武備之第一と被存候」と、国産開発による藩財政の好転が「武備之第一」であると述べている。

(67) 愛山文庫、津山郷土博物館所蔵。この史料は、大村の津山観・経済観等が窺える有益な史料である。しかし、史料中の大村の提言は、安永改革で採用された形跡がみられないこともあり、別稿にて検討したい。

(68) 「壬辰更張録」安永元年十二月十四日条。

(69) 「郡代御用日記」安永二年正月十一日条、愛山文庫、津山郷土博物館所蔵。

(70) 『津山温知会誌』第七編（津山温知会、一九一四年）四四～五三頁。

(71) 「分職令」によれば、家老を指す。

(72) 「密奏」に、「為政・従政二大夫」と、また、「大夫局の法、大目付杯へも相談ハせさるよし」とある。前者の「従政」は、「分職令」によると年寄の意味であり、後



者については、前述の「奏言」の御用席の在り方と同様の指摘がみられることから、「大夫」とは、家老・年寄の御用席を指すと考ええる。

(73) 「江戸日記」安永三年正月二十一日条。

(74) この点につき、前掲「墮涙口碑」に、「米沢家中浅間金太郎」の話として、「御名様(康哉)、或時御政事の個条御相談御座候。鷹山其節在国に付、国許にて愚案相記し、差上候事御座候。是は国事に掛候事故、当家にても秘して他見為仕不申候」(二三頁)とあり、康哉の相談に、上杉治憲は丁重に対処していたことが窺える。なお、米沢藩士浅間金太郎の実在は、米沢市上杉博物館主任学芸員角屋由美子氏の御教示により確認された。ここに記して謝意を表したい。

(75) 前掲『津山市史』(第四卷)では、安永改革につき、「『分職令』、『政事堂』、『記録役所』などの計画は儒教的理想主義に過ぎたのではないか。宝暦改革に佐々木一族が登場したように、今回も新任の儒者二人の改革は、家中武士にとっては唐突に過ぎたといえよう」(二五〇頁)と評価する。しかし、前述の吉永氏によれば、飯室・大村の藩政改革構想は、いずれも当該期の藩政改革の基調に即したものであるから、安永改革の失敗を招来した最大の原因は、彼らの改革構想の「唐突」さよりも、藩主康哉の藩政への関与の在り方にあつたと考える。

(76) 江藤彰彦「福岡藩における記録仕法の改革―法の蓄積と法令による支配―」(西南地域史研究会『西南地域の史的展開 近世編』、思文閣出版、一九八八年)一四六

頁。

(77) 前掲吉永氏、四三頁。

(78) 横山昭男『上杉鷹山』(吉川弘文館、一九六八年)五八〜六九頁。

〔付記〕本稿は、二〇〇〇年十一月の大阪歴史学会近世史部会、二〇〇一年九月の佛教大学鷹陵史学会第十回年次研究大会、同年十二月の岡山地方史研究会十二月例会にて報告した内容を加筆・修正したものである。指導教授竹下喜久男先生をはじめ、各々の会においても有益な御助言を賜り、津山郷土博物館の皆様には、史料閲覧の便宜をはかっていただいた。ここに記して深謝致します。

